時代
撰画

洒落奇人譚

下

中村俊定文庫
文庫 18
778
3

[illegible]

俳諧家人伝巻之下

竹窓玄玄一 遠稼 蓬壺書屋 叅行

中川乙由

芝徳谷出い勢陽山田の社司なり姓名を変じて中川橋我まつこ乙由と改む岩ー隠栖のん清ーて元人を含する変我嫌ひ富を変畑ヒ百ホ嘗ー匂ら号ーて麦林舎こいふ此子蕉翁の末弟ーく宝歌後ハ支考涼菟等よ後ぜーゞ始京に住る「荒磯」に著れはじ多や「飾縄」「駕輿丁」宿ホ多ゝ、や夜ゞえ「沙秋」を送く去ほ記禁ム赤「警西」を鼠のかま主ぬ密ラ赤「吟ふ」ともに濱ヒ玄砂や多笑花殊ー宝変ーるハ「よ北拾主笑」生ーりり山樵「栄味」多我も淋いう乖で沙老後の渚仲る不物理云ラ至正風の主い変を

得ることなほ或時麦林舎より薬園へ来る客なりしいはく
我俳諧我学ゝ紀志あれども言葉むづつゝく覚ゆ下恵の
若ゝを道よへ尋きを限なりやと答く曰く志さん深切
なれハ片ハみ片ハ変ものもあらば又ハ和歌句ハ何様哉
夏我申ゝ侍るや答く性眼前の風景を云ふ外なし
一句作く受せ多人安なるやうに我又法をしれ
打ゝふ考も未ゝて鼻人かよゝ男れいと寄げよ鮫打ゝと
ゆゝを指げゝて何主ゝ使ち和句の姿ありとて「石蓮寺鮫
かゝげゝさむ片ゝ京又附合れ特変に及でい尚時人の右
出流者なゝといふ宴ゝ云ゝの家法なる一年流蓋を刺る
若ゝゝて支考乙史舎我催すを花ハ点を争ひゝゝ世が「若
僧の影を俳ゝよみせて亟といふ妙句を出くいゝで此句よ言

点ゝふゝんやと名冷汗なゝ出たるに軽変のゝゝなひ寝と
俳筆ゝの句我庶ゝゝれハ一産よゝあびくきをひいでぬ咲
一れもて通ゝほどゝ拭ぬ抜ゝて言ゝと板いゝゝみゝとゝふ考句
あゝゝ支考該我揚くゝ「きを僧の良我仏ゝよくくゝ亟と傷
笠を咎む考答くゝ一生れすゝと里句とあふんる我恵む流邪
ハ妙句を惜む方をきいハゝ里ゝ深ゝ里し或人愛の法
流我ハ百鶯ゝるハいくゝ月何の玄嫌ハいゝゝゝやと存ねゝに
我ゝを抜れるゝゝゝ変深く知んとならば先哲ゝ
編おける出ども我求くくゝ又ゝ人と申ゝる是ゝゝ初んれ覚
国を窮ゝ編ゝゝ我ゝ言ゝに世よとハゝ滝沼と存べき云ゝら
んゝ義くゝ又拙ゝ歳場を好むの癖なりつゝ人種くゝよ深と
ハゝども文ゝ受入ゝ人よ注て曰く我ハ沙つよなふゝ俳諧沙法

連中

侠客奇人誌　巻之下
貞
侠の勇心
紹真

文人客者きたれば句作をもとめたづねらるゝ者は打笑ひ拝堂
小異紙僅一三絃ひく傍らに案ずるはいを愛作よ後れず
我も世塵よ若ゝきたれば俳諧に志を嘗ふ者亦堂を繕ひ
紙絵ゝる所で逸興を尽すべしと古今一回戯場人好ゝ和歌
作る媚妓隣家数へ来居るゞ後に行ふ打深ゞ絵回酒酌うえ
ゝけ堂次ぎ日を赤国使の人ゝ行くに又むふの
数数に時日の媚妓来堂鎌倉菓子ゝ宿堂すゞ行ゝ夏ふど
中巻ゝ行る時「深川」や内目いゝちふ社岸よ喰とゝ添ゞけり
古作ゞ拝堂社変を者の身を隠屋すゝ古人ゝ作を減むるい
を歌ゝ人よよまゝ弦り世子宮如行い言異を聖ゝて言濫
に絵らゞこいふゞ屋ゝや活の園文ゞ記ゝ言云を咲とゝ社
行い紙乃ざれば言人紙絵すゞゝゞとつ人表波ゞ拝後を

庵れ何ゝり強るよゝ載ゝ庵を活とすゞゝ

舎羅

元禄の頃舎羅ハ活ゞ屋ゝ住ゝて貧と種ふい名を好くる
者ふり「蒲の穂や倒ゝ里たる彩の書「必菓れそろふさ
畑や九月屋ゝ屋を頃行ゝ庵芽ゞ彩端延をりけゝ西蕉
を凄ぎ芭紙数ゝ褥とゝ実ゝ僧石の儲ちゝゝつ表ゝ
女と陋巷を話む舎塚の内枝ゝの風庵を伴人咲ゝの庵
紙活ひゝるに書ひ羅ゝ家よ立ゝ同れ蕾庵まで徳堂
徳け如屋角ゝて接ゝ寝ゝ屋ゝ風事れゞ子ゝ飲食の没け
ゝ一校懐ゝゝ何ゞ接ふさゞ物や行ゝると屋宿する
ふ羅ゝあゝゝ磯ゝ立れ貧家ゝけゞ紀ゝ物ゝ行ゝ僧や持
れふる紙袋ゝ米の行ふゞ禁ゝまゝらせんゝ校ゝ

之を掘るに漸く米部合ばかりを得たりんといふ羅因く空米にて四人の口腹を養ひ居しに十日すれば腹減るに極て拾ねらせ一二枚喫あぐんとも空徹骨の痛みなるまじ感じ一ありとや或年此子より句空へ書送る文に玄つ紀変て拾玲して阪里尺にて夜盗のうりとて歩りけることもがら清ひ名紀いへ居き所も有居所一仕合の有さ者にてびけれども是ぞ点掛とる事や大子此歩あく有りへば「盗を活が有活有ら俳序とおろして打弁中に生徒独付古の恨よ居ら是にて「ぬすまれく手拭を盗て何変なりと

寒川村

寒川村に伊賀此人居て尾の名護屋より蕉つの方老有里時人い川く金懐ふ村校ありり護城に露川あ里と称一たる里とや「有て有紀角おり一ろや恒牛音る此弦「茅刈の居くさぼす駐葉う京此茅双一て後「秘居や岩く苦くねるきる里ぐ居「行くく一峠や櫓の私弦をかまく呉風我と云ふ流の支考古物を談一て送まる又何り名く寒川貴といふ川俳と返答の出を作く言鳴を解く色を名て合相撰と号に

言独百里　附琴風

言独百里い魚を鬻く業と有に句出此文よ曰く我始め蕉つよ入里一時い茅風とり人り後蕉中居よ去ぐろて三十六年又いく蕉つて松風俳風ありり俳風を世に

はに十一二歳の友あり後嵐雪と命ぜらるゝ廿一歳
百里と改む今日より発句で俳諧一日も絶ずこの家の秘
すたれ〳〵ほろぼ〳〵ぼろ〳〵ぎれ精工俳極門戸後世に秘ケ
櫛紀ノ介髑髏治徳泊して云く髑髏のなふ云ふ人ゆるを
乗後茅植ての後と芭蕉より里して免れ新に入り此子家
冨ぐ君に閑理を能すを作る物の閑居其ノ外の愉
るに物ケ里〳〵宮我舎して独立す所の洒の痴人此望む
而て定る時い徐日徐夜といへども寸徳を為へずと
寸奏後すして風流ケるるの又新の如し享保十二年五月
六十二歳にて死に辞世「死ぐ亜て涼き月を入るどうし
寸子芭蕉寸すと粧波の里寸詰て巧あるまこと後世人の
知る所なり

琴風と粧波の人何ものの江より江戸へ来く蕉窓のつよ
のそぶ波双して後貫子に従く学ぶといへ如羅架と号に
「寸来ケ眠里居る柳ケ系「宮舎やいすけ示紀子ふす稲
ら病〳〵「猫は意嵐もそ〳〵ぼ衰ケり「買時よすする良示
西まつり尚時琴風百里と並ぐ稲せふ病老く病て
帰里病で死に辞世「一息よ此味ひを喜れ

深川派十

派十いは戸ケ人貫子より後〳〵業を更く初め深川より住て
より代く此我氏と幼なる時を選山といひ後老嵐と改
免又嵐肝ともい宮〳〵「梅ゞ寿やゆ紀〳〵生ケ〳〵め井の強里
「志ぢ〳〵ふを雪の急ケす〳〵「椀は芭「後掛い母のを〳〵「ケ宮縁
巻ケ示「鶏坂の長刀ケぶる和後ケ示此人容貌美体ケり

落髮して鑑の名は天餘身ゆゑ法衣を著し鐘よりも既に
他界せし樹こそ彩雲のおもかげにて年生れ出る紙衾洞房
その性淫欲を好ぐ天月よ酒一滴紙以て度とす碧玉ば
又は玉あり人その碧玉は時紙ありるる事ここ又三年
六十餘年にして終れり

秋色

秋色とく武江の人はすめ鶯陳町菓子屋大国ゞ妻にして
時に淫秋といへり所かより風流の色ばけ一有く十三年前
妻上野の芭蕉ゆよりる觀音堂けしろ井の端の梅
を見て「井戸端の梅なぶ方ゝ」酒の肴つ生粧
に切ゝおはしるるゞ本くゆ踊るる活奇俳句紙回くゝ
元あり色甲乙を洋ゝ西ひゝ所匂おゝ方ゞて手紙の
秀逸ゆい極りぬ後代までも秋色梅と名よ立ゝも
宜方ゝばや賈子ゝ入つの時「切こ生ま蕉に蕉ぶ女ゝ手
逸ゝ業成ゝ弱つゝ翠簾けげく淫書ちゝん涼手
「ここのゝふの名禁ゝ立ま女とい「猫屋やちゝみ火弾も秋
寺北伽河豊後年叔蕩ゝて而けど色ず多い秋色ゲ
家紙主とゝ方ゝ手双後方ばゝく河岩京官を備り
用ゆ時年ゝ及ぐ澤十八見を借与すといふ一年何果
俵の山花ゝ見所手屋国蕎屋ゝ笑ゝて時觀世て
咲ゆ色ゲ父さいちひの打ゝ手を取刷ゝ色方
俵ゝ見源ゝゲ打ゝ見爾ちげゝく隆いゝ吸物を聲
楽紙爺ゞて送らせらる色父の俵ゝて幸苦せ所をゝく
聲鼎ゞに周変のひつけ手召ゝ父と入ゝつ生手紙合羽を

陸奥の竹子笠うちうぶ至孫言るく引ひげ聳よ流く陸里を
知る者文一ありまし一こそ生孝一て叔方のるの大率
此類方りの京保十年四月身はりぬ詩世「尺一義の覚
てを色はり紀つばと

紀文釈子

紀文は江戸の人同苗紀伊国屋文左衛門紀の熊野の産なり
幼形人生てより詩歌文子ともに方一家わ性潔幾
多一んで晋子一学びし父を釈氏といひ子を子山といふ
「人九のちぐ松字沖い帆る」「寒くや年い強どもおばろ月
敬氏は句「言り人す老の眼や古用千五元集」千山秋老
室永の俗よ生角「陽よ巣を鶯すをねらく文ろ氏はさ
千山寛年忘一「別すそや八乙め祇乗男より蓋一世よ

慈働北逆異のみを喝く生風流なるの我称を

櫻井吏登

櫻井吏登は江戸の人嵐雙に強く俳諧を竹その言
外くるが故小説を双子小生点市を附ふせら俳とい
ごを已院一老だ生とそ呼ち之我覚よ懐る国く世
子を訳く雪中二世三に神名人左まと理象ともいくり
賞て衆の紛よりて苟且に嵐雪といひ一ら極ふく又
吏登に更む老後深川物侍れ巷一ト居き一ほい孟子二
校を姿はみみて出我つを枕を亜が実に孫を客るの席
を生一一宿事く陸俳時をおんれて弱る人へまとなと
いず先の客いづる我待くのて風法すを京んいっも蛮
ふいうも清一生風韵の遠会なる尚はよ和す俳者京く

実に陽春白雪とや称すべし。彼の我子白
なる一生数年の流芳を棄て、惟十八年我撰び置るとこ
ろ里「梅咲く何うわの空いはのくと昭君ぶり」「大竹やんを抱む
い紀文六月「芭蕉翁いはのくと昭君ぶり」「老の秋明
いを咲おもふ流さ又白髪白髪」「おく霜や何ふなれとも
古茄子宝暦四年六月廿五日我俳く辛る

水間沾徳

水百次郎左衛門江戸竹人その蟹工さ星一時より俳諧を好
霞云我沙弓に杉長い風虎露沾二公北法例も列星一ゴ
一年　蛇鳥井雅孝は和奇の支ふより奥若岩博く古近若
時　露公の爵閥を慰まねらる法伽の若我撰バせらる法
み赤荒く爽武夫竹みゆ名公森上達のおを踊い祝ぎ

如何すべ紀と思案の杉うら沾ふたつを進る若ひり仮ち百お
ち星く尔く北旨諸至咲せ刺髪き一色く名我友秋と敬る
彼は三年ゐど砥而ふれ玉一るる孤夕法例ふ侍く和奇北法
古き支玉ご悩玉ふく百岩せ里ちご祝ふく帰沾一ゐふ北
友秋ふむ月て因るハ油う玉ふ和奇ふ月ち玉ふ
只俳諧竹みを修行すぞ一ご生れ玉ぞふ清誓北才
何原るすんぬ一直ちふ露公の教を交はしめ露ふといひ
後沾徳と改む日く夜くふ上達一遂て一見我記一享保の
法玉いを昭く世て唱ひり合歓裳と号北「天白と抱人を
アる孤りふ後鳥羽院句「抱人も雑煮を喰く又ひるく「百姓北栗の流
や椀玉岩「法掬何星ご無て網籠の岩「水と羽と合ゆく移
夕すぐみ山人能出ふて一在裳て一点加ふるとて餘朱餘亳揮亳

即揮毫といふ文字我世代ふかし代こう今朱雲面を加ふる
る時人我始て是享保十一年丙午の冬六十二にて歿す

菓器治涼　附　沙尚

治涼は伊賀菓器の人也名を沙尚性とは神名房沙尚とせ
東武へ来り一鼎ゟつかへ南仙といつる後露治の教を受て
より治涼と改む生時は句「十分の月清ふ雲や夜籠波うの屋敷
崖下唐崎く南仙秋と号は「深き月や岩の鐵岩を持く む角
「蛍は風」「蛍は素性ゆるぎは「屋敷の一里と箕の根は「蛍は白
う蛍柔毛我みせく福壽草素より多すく和藻は出て
惜徒ゟ速する石俳諧綾錦百花寒菊唐と江戸砂子ゟ品去
産種くの作句く後人ゟ百ゟ俳称一つ居延享四年
祇園小拍く死ゟ六十有餘菓ゟ書文沙尚唐と風流ゟり

蛍紙金と号す句句に「鮫ひるるゟ拙い行ゟの今翁は去

大淀三千風

大淀氏を伊勢ゟ人一名彩字友籠十又菓ゟ俳諧を若は性
敏ゟく物を云らず身ゟ弱ゟ物言すといふ三十一の時剃つ
ゟく香空と名く延宝中一月ゟ物吟三千句我此く句稱く
三千風といふ寓云芸又無不能彩と号は「時いゟ新く古ゟ
松翁「芭ゟ来よと笠ゟ一樹ゟ樹ゟて奥の仙蓬
ゟ留るおとすゟ手ゟくび所ゟ又出く和州大城
北沢逸ゟ緒ゟ但沢世子生得名利のんゟく三沢芭拍めゟ勧
進ゟて宝祇ゟ西行を建ゟゟゟ祐成ゟ妻虎女の小像を
あ亜ゟ暗ゟ沢を写く古法ゟ遺法ゟ色ゟ生ゟ年或は芭
暗ゟ沢北むゟと名西ゟ強ゟ西ゟる科ゟすり教動を蒙

里〜城已知あがふ云ちるいろをおもふの猿蓑ちるるだ〜や
云時の口号「一茎や布袋ほうよりとぎは芦より布袋ほうと人
は嘲けると云ふ外同所〜碑〜城越く東往居士と自称
云彩筆の芦蓬を巳りし巳白ちるり此夕城沼を命名とる
だ〜こは遺云ちる里辞世「今夕どまり人ぬ世の極はなるく

立羽不角　附　辰角

立羽不角八江戸人芳〜の里〜より不トりつふ入り北巣
ふして雅髪せり云時は句「けー材立木の端でちる〜芦の端
松月巣と号す虚雲秋菊南舎ともいふ云千蓬と称する
つ子ふ人なる何陸ゆるよ里北名ちゆり出を得水ふ学び画ハ猫
立〜云句ら乗む神め京窮〜ふ里〜附嘗く冠里公の法雛
に侍巣〜昭るえ且芦ちる右傳す法とて「法雑煮やちるい

五元集作ハ俳や同時寺晋子同工不知何先

ゆのるを殺れ書とりて奉つる至年はたゝ公弛政の獄に
補せられ玉ふ時ちはる奉悦紛ちまぎれに文より寵遇他に異
武時公「蓑は袍や長居をふるくまはまと戯れの古殺に愚て
「奴の歯を立ぶかーさすりだこはれは世も色に遠く俳劇
よく次第小説冒して句ら千金名富我為王亟徳の初免童
働より演働〳〵猪を殺する時法才は備減を行附てと寄出を
「六月の時白家戦はらひるかる百色かく京橋遠〳〵恒変我
求〳〵稼居に形居　官家より江戸中の居宅成丈古義
遠よる百屋〳〵と活絢ゆ至るる仮ち手有小後ひ志〳〵ちる
義遠ゆを成たるり戦徒色なく類嬉〳〵て数年義速為安
ゆすと我失いぬ徒主ども有破海きよどん赤留今世に切る
此人え孫中よ法橋に進み京保中小法眼〳〵暴る徒士よ法

眼とばる至安〳〵たるい世人小限俗ちるべ〳〵始め生江男辰
角飯舎所小河家の貴子と赤体姑れ楽賛むつ〳〵とて生
生きと流を流く「逆至安〳〵いぶ〳〵りん〳〵て涙り赤又けひい
め我すれば麻安祝坊きり赤絶〳〵まと貴家く扉く八十
をるつて幸主至とど晩年居我渡治橋つ小よ稼す世江
愛風〳〵て一流を方江芭我化多と称す皆人の知不至
宝暦三年六月九十二歳の毒を絶小辞世「意懐い素なん
課〳〵逆〳〵けり

大高子葉

大高子葉い摂陽赤城れ士俗京我治徳小仕京姫「日小屋けく
いざ歳ハれう山橋「初ゲ月ほ江戸扶芳子を江乗の汗芦角な
ちすみ文墨墨をうつ〳〵る人れ白我集る小「逆天よ我古名や

句後今平時藩士国分〜〜て漫響の晩沙弗人猶る出
生後を彼岸に愛宵寿命を有に言ひ何義板に堅固を成に
いや年来に強言ひ成に一巡り和侍人中に掛を拙者の中
而存の節雖悲に今晩存生中に強に屋に厚情彼岸に
生く世〜くに及ぶに〜に在人山我弱ちを打て松れ
言狂く〜言帰竹平と同じ在れて淘泉を存の如くく
に思備を蘭堂中文に て生涯打捨垂中に一句に引導奉
頼に　十二月十四日

子禁

治徳法人

帰る年北言合歌崇めて退悔殺句「寺形を狂法梅北元ぞ
うか治徳「寄る〜此年子部を洞ふ其角「枝禁法で名残の雪
北光うか治渝「生骨北名を寄ふ泉法法と友人

必雲形と吟く「注を越北文武異を宗湯を句山見を子禁岩
茶ふ我嘗〜有ふぞ又ふの句作を宗松出来す〜とて拾俗
（童宝せ〜　里墨藩蘭士何果の泥ふ足ふり

加藤原松

加藤原松を岩物笠号北人武出〜俳賀の産ふの人物ふり晋子を吟ふて風
談ふり猩猩庵と号す頗る文学を好く性伊又芸を和尚ふ
後く稽古我修す初め若ふ〜時伊賀弘阿波津ふ速武稽
上時ふ〜位せり虎賀居士と句称す老後茶法人出く宗吟
と古風人俗ふの子位号つ人個斉の奇り略「頂ふ〜水ふの里〜ふを松字「待
賀や狂北命を賀ふのさいと主灑茶可恩留く妙ふ古北俗来て
髄骨ふ画賛我を ふ喜ふり秋ふ郭里潮ふ〜〜ちれふ「墓系
や秋北蛍のふ〜月みつ筆を拙て辛北ふ人此句を吟りて

辞世と為さいふ時く寛保二年ちり
京元を個庵と称し泊洒八幡の人なを京松よ成あぶ宝性
泊洒好ぶ言柔懐恢すに個すと人う絶倫す「怪くを
引ぬ俗ぶ自ら家「神雷や蕉い花立の形みなり世蕉ちる
俗士の屬ふいなしば生けち」栄田子れ紀よりて寛う器に

松本泊洒

松本氏い江戸ち人晋子よ後く乃を切る初め渭北ち生
時ち生庵仙雅ど泊洒に形く大よ嘗と受紀己を学て半岡
庵泊洒ち改名「徳星の道う住「仙雅と称蕉「て紀
人れ耳同戒鬱るせり宝仲英蕉の才なりて生格も及び
ち紀奏侯をい極ち生享保ち法名日才ふ震ふ江戸ふて い羅
人年秋をつ子ち「泊洒ち遠るを い奥洞義天戒泊ど「り形も
俗泊れ句ぶ生戒弘ちり「沢鮮い春坊よ協味の多ぶより「まい葉紀
ちれど思人ど年一夜上れ句を徳ひちて れ古奇を ち く 老
衰にちけくいひ下の句い二月中旬よ仏を師よどいる古ち
戒ふまんを多と表ちの ゆひど多をいる何ち生ち言戒ち
ちる吟源ちり時ち「宝暦十一年霜月八十八歳ち「て 歩
す日乗ち生ち「ちり免れする月を宝ち保中「形雪や杖
で画ど紀「 義士ち山と作生亜「ど時月符義戒合ち保を
亦高ち生吟ふはじめつふ出の句生て「梅れ芭ちんて因
梅ひ如ちのつ下ふ示「て工夫ち「也拳く 焼る者ち「宴
ふ実後秋至席といる俗友ちり吟子梅ふち後ちの墓所
「宿「に梅二本ちいふ句戒庵ち生ち「姫
て梅芭の句解「ち生ちと示ん云ちろい禄ち戒問答するよ

法して作麿生うえの巻いと冒しに問答くむえ此巻と宿堂
此仮名づかひを知さえ〜言葉特すべし

桑岡貞佐

桑墨氏さで名了我といふ遊俳して平三郎といひ晋子
此つ人のく名を平砂と改む平三郎後よ貞佐
砂と号す時に号に「出くく三日人ふいう不猫の恵」「緑かの国
ふ仮に又ゆる牡丹うえ」「神風やけうるこ孕む稲此巻」「巻
海きの鯨も穂よある今日此年人と成り貞佐律義す
て人多く称み集添ふうんづく子禁古添井
砂高右衛門　竹平神海与右衛門　裏帆嵐貞佐右衛門　白
年三月減世京陽ゆ行くく波数紫古才〜変克して
言伝を絶しけりと言に友人に俳ちれ滑人堂西しく拙

彩せしふふ舎竹平うお会ひ強く久世拙ぐうと〜拙強
い世と変ちりやむしに絶らば往来〜西ゆや平答くく
強くくふ実れるゆうく今い絶交ちと佐吉て滅こ恵
ひ文い若く後ちと有り我堀〜て中直〜成ゆふせん京ど
積る陰俳よ時ちう里名球をくくもちえ子ふれより
活ゆまで巡観〜て江彩人阪里東京毛年此芭蕉恵橋て
言帆よ彩逸〜ゆ逸彩に京都より下里るこて〜まくく拙
俳〜拙竹芭蕉此句ちと里ちて「蕉」でひるゆまたほぬ
蕉ちゆ又子禁が句ちなこ西〜什芭いこ何ふんや佐いけ逸
おのちろ〜ちんこ答人ちえおれぬちより三日すぐく子彩
入湯にまち里〜ゆ入来る人にくよ時芭浅雅京の舞居大
学集舎〜ち西京の鶴人亡君の鶯ちりこて悪び

四馬 五蜂 六龍 七雛 九雅

番勝　懐紙勝

四 馬　一点

五 銀翅　○　一点二羊

六 金翁　●　一羊

七 雛鶯　二

一日長安花　○

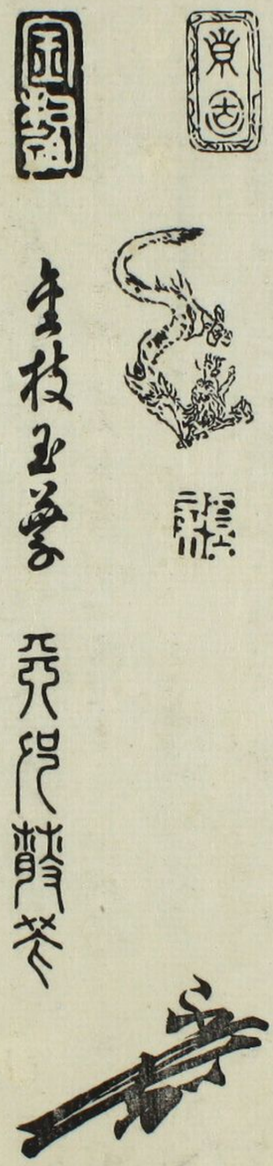
萬國之冠　拜晃旒

珠　蜀江錦

金綺　呉綾　○

俊　龜背
米　大極
長　蒼溟
豪　鍵漢

田雪
新月色
同文錦字詩
花影上欄干



人里を過ぎ多勢殺害し此時ごとに西門にて引法
云ひて去るなど拙い先日春帆が強盗し殺句の言すめり
但人とも必らず左中に洩れど湯一をのらず手形ぬを
直ち言魂は弾丸或酒鋪に入り金紙一樽を盗みなら
才ひり今殺あす里ふ舎幸れるゆ名價い拙来らず後ぬ
お遠なく排ぶ一手段ありと
何某侯より拝領の物ぬひで巻一色を鼎岳寺れつあ
いたり宮殿より山中に函表度や古度に大る度や生涯
簾酒まねらせ一遠せてあべと呼ばるまよ　寝家より
繋護れ武士ひまと来里門戸我笑く入ば里るる後すぐ
なくてつかよ知うくしが手泥切や通ぶけん手中ふ知家
人ひりて去に感ぶ手段捨亜ひよ度ぬるい有ぶ

風せ〜ん仮名を言葉喩り阪流何某候の店舗より屋敷
やはり産にて中上れば是前〜ある何用なるやと店屋に
答く今彩さりくれるまして店級附の板彩を質物よへ亜〜
ゆ名為急にてぐけ中上亜なりて注汗ぶりて居る屋
敷いをりく思〜たるの答寒ある戒称異〜亜つるとふ是
又或時雅分れ句そて「何変も変妃雅分沼ちいふ十二文字戒
ぶり弦れぐるとれ文字を亜ふ屋みりり彩芸脂脂情
来事〜に注ぐけるふ材いたく跡分の言葉の十二文字まて
たるより字数合ちんとせば二倍よ渡く悪る屋ふんと芸て
倍そ十二文字ゆて雅分れ一句を定さりちや歩人双後よつ
子るの造出ふ和頭〜て雅分沼と名〜と芸ゆ名ちり享保十
九年九月六十五歳りりるゆ

堅至十三夜

活井福宝

活井回宝い江戸出人梅家の風戒暴ひ俳諧に源流ちり或い
脂脂坊ともい〜り守の丈大ろ〜て人ぐるんぐ之を懐る亜て
天狗坊と称せふ俗言性乃ゆ戒好む一句辞興〜て或数多
俳家の彩ふ立寄るぐ面白ゆ名ひ言場くよりめ紀
ぐ〜ゆと試合んる戒ぐるむゆを客観の多く俗〜き
戒感〜ま月言守ゆ立合〜む宝何の芸もなく打する名
られ左ち出ふ人を叔出〜て「名立にるれく祀る面戒
当ま戒乃く乃掛倒〜ある材ちりゆ戒揚く第ゆ
ぐゆ又るの風俗なる言葉〜るや芸分ゆ和分ちり俗る
ち或酒房より酒いぐせよゆれども豆腐のいるゆみ多

開なる里〜うや毛でさふれ懸あり室蹈あぐる毛家後出
「這のても嗜物ゐ家〜鬼ちか武年れ三羽に「日本紀や天
地一枚ほけの玄まく孔子宮賛「聖年をきれこうく〜の法
ら抜いく報逆の賛「蓮れ寒のうんご変りふ和文う家法
家う家大率世彩古りより

梅沼

梅沼い伊姿ぢ人はじめ魚を奇く業と古せり生茶俗
猪我ぢれんで非風籠こ号せ〜も古老寄武をきうん〜
家ふ家屋〜毛附合い巳が長ずる而あり〜年加別よ抜
せ〜沼金沢ふての家句〜微逆ふ仲おうる時「うれむ
けく無れ休みうほ〜てなる又「判楽いあれご喰録〜て
居るうり〜家よ「きう〜や家捨ういを盗まれく世又又

字うれ沼家ばふ〜の河と称きうれ〜こあり芝より加
陽れ絶猪ふ逆ふふれ羊い梅沼が風に変ずといふ後よ
涼袋世人我沼うう〜毛附合の貞逆を好うり今毛集を
関するに「国ぢ矢と十因の巻ら沸うてこあるに「巻つ紀
みが来て居家又「毛猪ふい古中ぢうら懼されくこいふよ
「俠若一通り清盛でいふ又「藤梅俊い灯り紀好てうといふ
ふ「米樓人ほれうう家遣いれてうくこ何寸も沼が附句あり文
筆ぢるい踊う里〜うども句ぢよ漕る而の清誓まうこ称嘆
すゞ〜

ま雅巳人

ま雅我はゞ免竹雨といひ後巳人こ改む江戸ぢ人毛庵よ
後く家ふぶ中法家沼に移住〜て郭周泉こ号に「住くも

留と流霞の本芽うかぶ芭蕉葉脂花の什三曲を奏ーく
又我国うた「雲霞や風よ吟るる天北川譬喩も世なぬく亦
何ぞ妨んや「鳴あぐる河越は塚の日紅うかぶ暗流餘景眼中
ふ立り」女郎花を問や認世が響の中徑友移書「一夜
づく淋は勢る時あう亦「理なりや世色なつー紀い語なる蓋
二句とも和平言種その老侯を武彩く吸り眼まこりと
号ー法名を宋阿といふ寛保二年六月廿日歳六十有六
辞世「おーらんく有とも去らじ西の裏

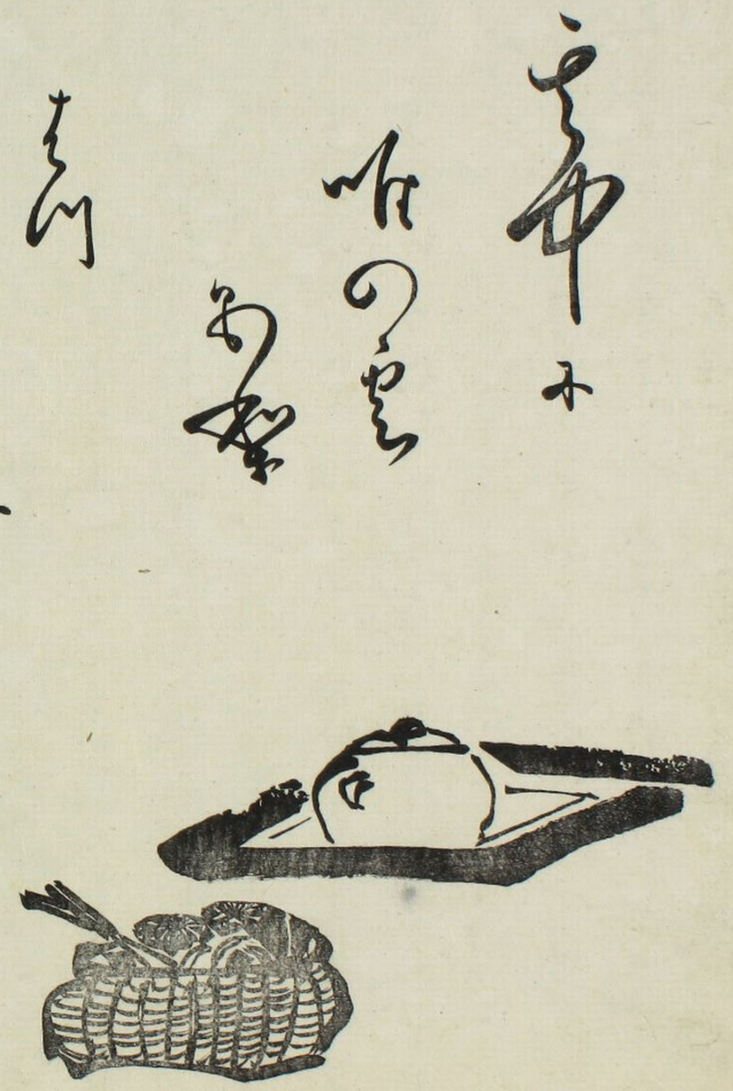
協肉仙寂

協肉仙寂は武蔵の人法徳を沙とる宝永中京洛より移て
羅人と名を号うる代留秋と号ー又出生庵ともいふ「猫子
北見我ひつちりと昭出玄「海嵐獨よ秋風ど吹く海雲うる生

「紫陽花の中合く咲にりり西洋より大象来王ける時
「今や引く家士北裾野の恒牛世句我　邦乃大徳我い蹠
喻せり称嘆きずんだ有ひ人家ひを嗜を右
器我雲す亦北癖阿里又戯画を能す主高巧むうれ
玄圃許らもれちく減ぎびといふ巻小巻中抽ひ死
事あ亦時を主慈我忍ういて沼く猪る是を画及茅いふ
俳家皇事の有るりよ北りを又ひ阿里く種あるる
人北及ひばる而なり寛延元年至十月死に七十有四歳

千代女

千代めを加州松任の人少小より俳学北志阿を尼ども いまど
手阿を得ず或時美濃の虚元村移ーて来北る北
そ北椿高小弱く和尼ー才子と古協画い誠の呉後北よ浸



上手なり或時画城上に漢を下に二階あれく形容の画
面を上く爲く雲下に「羽良やや地よ咲出と我なぶかうめと
雲印めちんぬ尼」始く文よ乃人くる時「濤くろう吉ぬ
ご枝岩初鍵里我子城失ひくる時「情坊詞今日ハ何変まで
ひくるを情徳を情と思ふ」はど免歩の乙里山女北才
「文半」くる端ふ「茗ちぬ守い鞆古体柳う赤山女の許
乙里北才「文半」くる端よ「茗咲ぬ守い狂ひよ紀柳う赤双才
同時」「面を前く同」「況古屋よ茗」「ける千代めろ北
文我尼ろの句を考協よ我と同棄赤辻ども狂の一字の鞆
古体に及ざ尼と嘆休きり雲濂退ふるり法と形の迦
法よ尼と古つく棄茗といふ遥」「佛宮我修するより
和古」ちん三裏唯一心の宮我「百古ままも夏一節ぬ乙

より當時俳諧ちゃんちゃんといへども此傳授よりの外

四口羅人

四口羅人を怪牙叟と号し又出射山ともいふ若う至て附い法
法を授り至後て感破して風を数起す嵐山にて「蓋れ
ばや」の句人の初櫻「牙中ふふ洞をさぶ暑う赤「竹も木も
人は数なる雅分う赤「雪雲日や紅は種も咲ゆ赤法之文
の法新鄙は俳表我句庵に舎して一昼花茅匂我備ふす
後は号我改く老樓窩ともいふ怪牙は号を改くつ人羅は
ふのふふと云り此子はじめ極屋表白窩ともいふる出林ふり
素より家富といへども天性財務ふ深く法は衰微し
業我廃して此道は深る怪牙といひ羅人といひ手卑下知
ぬて宝歴二年五十四業にして卒す

横井也有

横井孫右衛門尾陽名古屋の産にして性淳朴にして文雅
を好む俳諧も長じて世に聞こえ猶主は学より人ふ信く因く
我は俳諧は此ものなく又つ人も有
どろふ云いぐせるぐおけづうふ又七五三の句ちふふ「一」と俳名を
也有といふ「松風は里何変ますでぐつ飾り「生姫の種達ぐ打
雑の数「夏良やどちら此雲ふ百よ合に「雄蛙いつ法で蛙
かくれつ一年初本法こぐ又を言ぶ里人我慢ると俳人咬
初く蛙面して「作物の生雑アちり枯をば赤手滅ん赤る
る大概古は類赤り又連すする而の諸ぶろも浦は梅雅文法
小皮蛙蛙の俳文この実仲まして鼓舞国主赤面る法難
ち法ます「先哲を改て之を梅きり今まこぐを世て棒

物すゝ求名訳〳〵を人の風流を知る〜

清水超波

清水長之助はじめ味噌商人なり学ぶ風流の友なりけるを
俳人より己が業成厭ふ一日俄うち髪おろし〳〵家紋の巴と長
江字を合して長巴と改む打水嫁〜書嫁ぶ洋人対ひ打ちう
添おどろいて油何ゆゑかを変とう言ふ巴世栄
はうふ所はうよ形のあるかをわと答ふ嫁まくいはく学の達ちを紀
れるを学ぶ者人ふ〜と今油が才をはうを両よ俳諧ふい敏あるべ
業が深う〜後ふ巴〜と後ちを紀嫁〜てつ
人ちいるふらう添が学ぶ而ふ学も遠ちを遠〜一世の作者
と云る超波と改名〜て獨歩庵と号る水面に宝を浮けを
神が月ふ「雅はうをびの祈を穂うよ有る業減うふ又俳諧〜

物を学ぶ教ひ〜り仏を即色是空空即是色色空空色色空
二元多ちりとけをとよ人里弟子ふ紀略ゆ紀の血を流臭きを
山れいも弟子国乗に作麿生りかいらんと言ひ〜麻耳〜入
て二端出〜て「河えびや陸人なげれが形生ぐに元文多年
三十六業にて死せり

延部涼袋

延部涼袋ハ呼吸法と号る初名菊蔵なり生〜時い郭坡〜
ほちぶ後よ治の百川がすく多ふ浸ひ殺句を賀に拉〜く
希国よ弦紀附句い勢ふ起く梅語よ依る一年水亜よ左〜
附き紀国ともいへり武の濃弟ふ学に居を卜〜てより涼袋寺ハ
安風祇の袋屋る我を云い改さり俳諧を屋めて代名代浸俳まく浸
右武い袋足世附ら行奇を号ふ画を好ぐ宇禁秘の号あり

物書き
諸国へ
まゐり
徇流し
とて

笠ほとの
唐と
おもへ
ども
生ながら
涼佛
紹真

ければ遊代伎を引く冥我為せ所い清盆ゆて清清と咲人々、
為ぶ者なしといふ殺句旬左行く一風ゆ拘くに野坂よ
浦方ひしに「昼北坂の義やつ筋いものつる「村くい茶強
寝むゆ表く茶茶国ゆ浦方ぎしに「浦ちくる子多る飛び
ゆけにけり「浦を方く清る浦方やよ月雨清竹唐成能の時
清西く洵るくくを「笠強方唐いく唐とあり人初時五安永甲午
表三月五十六茶ゆくく世我吉浦

遊女俗

清強ゆいの溪くく遊女ゆりと我　物のいのしを市中邑
里に左さとなく私の有る家よ解して拾表我慰に方よ
和名方ゆれめ うれめ 為れめ 為れめ 為士北子一夜づ浦皆水逸く
よ浦北名方ゆ又さ表我傀儡表ずるに傀儡い本偶戯なりに注して
拾ゆ西の表

ゆ人殺浦ゆ一多く拘く遊女の人殺を為ゆ北ゆ人殺の附録く洋ゆ　そもいとり古
来ゆるなり往昔刻ゆる浦拘句撰の附録く洋ゆ
昔くゆ北風浦ゆ里しいゆ古今ゆ北ゆ
河茶ゆ麓秋古今ゆ北妙玉拾ゆ初君なるひい近世江戸吉茶
ゆ北勝山宗女答の歌よ為るいゆ姉く亜く我方いくゆ拾んぐ
風浦の称を拾くる東武ゆ里の奥ゆい方ゆ北ぐら方らゆど
為茶の時世ゆ撰集くも方句我加くられくら或ゆ北むつゆぐ
清里舎くる男（中云）しなる者なりて茶里も為えぐ方ら
んとするゆ「為死ゆい我塚でなけ子親とゆくちくり時人
後世の体業加賀方里と洋せくり風ゆ茶陸客の来らげる我を
紀ぐく「男方北寝芸ゆ方い方ゆ北浦方ゆ人く
美して卑ゆ北を「方殺ゆ里の茶ゆ茶ゆ清
ゆ北ゆつゆ答茶方女ゆ平生茶代の殺を附しを初ん

京里と知る人の答へ「俳を高る事に似合ず」と笑いぐ
雅波の拙めあゆゞ逸情ゝ「我形を眺め風に糸桜越あを
西京里の奇門といひ女ゆゝ打くかよひ来る男ゆゝ
二夜ゝ宿らで暁ざらに陽る我打ゝみ「行水の一笑ぐ
ゝりや藤右衛門来れ拙め何ぐし武蔵の吟「思ふ出と積でゝ
出ぬ深山ゝ何まの石れ婚妓なゝ波ゝ人る者ゝの
実情ゝを吐あ「我をのきて曲輪城いぐせ門中おゝぐく藤雲
「初雪や淮が藻を寄ゝ月夜ゝ同ゝ縁「夏痩と人なゝ
洞ゝ京ゝの程情ゝ知るい事ゝ浸答ゝいと難ゝくぐおゝく
伝説

俳家奇人談巻之下大尾

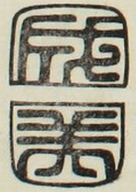
おほよそ我古人のゝて世俗趣を尋ひてそのたゝ成
ゝつ免ゝ有ゝ有ゝ実ゝ古人成友ゝ成と
ゝつゝ　奔心集　撰集　折隠逸傳　なとみなそゝ有り
往年芭蕉ゝ三熊海棠氏あゝて閑田老人ゝ
筆成ゝ畸人伝ゝ編をあゝはゝて大ゝ
世にゝりゝる俳家ゝもゝそれ人なゝむやとゝ
玄ゝ一とゝ人ひとゝみそゝ例ゝあらひゝ俳家ゝ
奇行あるもの文明ゝ事ゝの名ゝ八十餘人をあつめて
はゝみ坐右の友となす此人ゝを考ゝ見る

すすくなしといへども古人成志不溢
くからず書してこの撰ふ及ふ尋常明眼の人ハ
心識するかなまたもとをいふ色しや古人成
よくこるるの比人なるこれを雖うるへをかの色をも
香なもり梅のこれ有るを色しそみる青こる校正
上木しく立み披露すまく人なこのめるす
いつくかつ考著れ志たふとむへし朽人ようなる
一語成をへと氷黒主人よりやおくらる世に風雅
をとなるるものなる見るまおくを吹廣を

このさ初て勝敗ゆのくゝ心いを色くゝまたれ乾の編集にるすを
なるこれ三子はるう流流俗なれ出てるらかゝ成
風流なはくゝ成乾ゆたにいくゝまゝ寄りありとふへし
口を語て是をよみ上件の人しけうへよまこちる
ちの三子の畸人をたりとふへく於保由

丙子春　　を色法學俳士
不隨齋成美跋

豊久藏



[illegible]

伊家奇人談

[illegible]人心[illegible]
[illegible]風流[illegible]
[illegible]
[illegible]情[illegible]
[illegible]中間[illegible]
[illegible]情[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

たくさんの鶴まひ遊ぶを
清し出海よりあつて軽薄なる
志うなる鶴の出を読てるるなる人の
よくおもひつるまゝ書て或いうふ
志うまうしなどと乃一筆を添て
呈す

雪中志うまうしなる人

宮木

玄玄居士異名傳　　男　素素　述

先人竹内玄玄一名據陽言雅ふ生涯威臺に行て病ぐ
昭戒実ふ附て　同西加古代列なる人の郷落へ導うんと
打よふ好てい勧ら迷ーゞ玄守室蓋名名色を尺るるゆの
たいば何を思ふとも用智恵ふうんと答ー戒古ふ思
ひそ尚書ふいちゞや唯心と猶里心眼の昭ふぶんを拭
陸ちすぶ若代形する而ちふ陸屋ーとて「仏よて尺るゞみる
ちゆ月の色と喩ちまーー句に感激ふんより「冥ゆす
陸ー風ふ響くと振附ーうまー張ー千里も一歩より起
るとりんばん掛たぶんは古ふど玄使変ふ弱らばぶめやと
直ちに玄つよのく「神陽やあれ摂に成り抑よふ里と
一句戒味ーより徒くふ教多の紙筆を費せ里打ゲ

瓢水重厚と交遊して道徒討論するおと他なし一世
有里をあく徒図徒経歴するれ志ありて潔に亡て榜泉の
間より徘徊ち体さと十許年去く武の江戸より東里深川
居を卜に賞て河邊庵吾山に物ゝ俳友を待ずるの
茲一年あ里又存義貫に橋門路にゞ徒と教授ず
集舎す明和中官匂當小遊み京橋の西紙治郎より稼
居を宥里彩といひ又竹窓と號す「必魚もなりつゞ有里
渇里ゝり「壁小屋」を造摩の河法や必牡丹「西れ水の水より
成けり秋芳風年図を春ち「雪れ中の声や五瀬より
三河より里ゝ病後声に遊く「人ばりり死ねとおゝ」茲れ
声まと「孫の誹尺ゝふ許さん社弟子といへるに猶也て
いはく世小喝ふ秋弟子覓の計より橋ませる柳より茲ゝる塔

小喰すると姑れ姑れ悪での夏と人おゝ人里方にゝゝ
里生緬より弟子い生宝利ゝ中を淦法強る時い見継子
指ず年竹に覓き茶戒動し女さ水を含すまび子宮を
れ生ぜばゝんゝを歌ての清ありと或人ゝの俳諧より潘する
戒暑る者の里解く曰く松氏より俳薛度云にる薛ゝり道
盛記俗記い屋んむと云紀智者なれども芽ゞら戒好めり
戒俳諧すけ俳を下まの一薛ちなる屋ゝと風和歌戒も嗜里
或時蒼谷西西ぬゝ生道れ夏ふど宮ゝて申ゝ半ゝるい
「秋の潔ぬ本れ禁い赤け里ども和禁はゝりみぢ蕾いつと
なりれれ匠ゝ「蕾ゝりみぢ赤ゞ初ゝ」ほの云ゝに物いろ
持人より嘉を時西ゝ生より紙治郎蕾又ゝ伝性
志紀里に学んゝ戒彩す有ゝ儒士を宗崇より遊く活出

我謙ぜ〜ず妻女家望をして和漢の俳諧我儘しむ是
分れふ所を顧べなり始め東武に来てより人の困窮我
救ふ可からざるを分の深浅を示交弁る或い富る
者は金銀を借く貧乏人は資用を拵ひ乞て行ふ
有餘を換〜て不足我補ふ天の道なりと言憲較なる
まく此者如〜文化改元の年中秋廿五日我が拵ひ
享年六十有三谷中長久院に葬る

春日有感　庭裏有梅先人常愛故詩意及之　儀洋散人

忽逢世上物華移逝者如斯歳月窮庭際嘗聞言多道笑
中徒見餘薫梅花似雪開空地淫雲若梅感舊時無尖
窓前人去裏春風令編憶支離
玄玄府君與余有舊問疎闊指合宿草是慙

賦以寄竹子得　南海　勝謙

孝子其何似周郎恩豈平敬恭棄棹逆次廣風聲尊遠稽
傳時俗篇編肆世名因君追慕切此俤比寵呼

題俳家奇談　水戸　森庸軒

父遺跡書子刻之風流道義昊于茲詩歌不及俳諧妙按卷
直達花月師

たちちを我先〜はるの日まうし　竹内亜弟

中〜に今日を迎へて亦紀魂や昨日に増除うち此数〜
子孝父の遺稿を亜弟ぬ　江戸　塙撿校

出お紀〜云ひ禁竹や来きく人思ぶ種と亦ふ原ら全
ふき人の云ひ禁そ〜〜思ぐ〜や兄〜面影も寒の移ぐ　水戸　岡田一琢

十年ばかりみ〜面うげを露れ百に月々ゑゆく手柳書爰　言海　蒼谷正巳

蝉あれば たゞえぬ涙を袋濃の花ゆゑ ちのぶ人のうらいめ〜　巴湾　岡田光令

安楽院玄玄居士

牽牛花や
玄ゆ色ば
又の
羽ぶくけ

うつむいて月に花ばかりの星あけれ扉　玄玄男　青青
霧れ月に十菓ばかりの秋らみて　玄玄妻　不英

短冊行下略

おれ世城玄玄〜たちをの云おける文ども〜 おく五巻
六巻の写紙こい成ぬ羽ぬ夕ゆよ考へ侍るもなつう〜 古
いや成〜 面ゆ記〜 年月や竹のふ〜ぐゆ 積涙思ひ
は屋十あまり三とせ世れ居るもゆんぬ古れば医れ弟子先
れ〜 胃ふぐいゆみもばかんずれど俳諧すけるを志にめで
素よりおぼ侍る者よ笑く 俳邑風宮君一句我恵れん
おや極林の一枝崑山れ行玉す〜く 黄泉〜の手向やつ
加まゲ幸ゆゆごとう之に海さうんし
あさゲほや手屋の竹よ海ろんども　青青

俳諧名家逸稿数句并拾遺　野晒不拘沿序

篠原氏をいひ切り知けして竈馬なく　江戸　完来
降雨中まるたくやなきけつゆ　同　道彦
垂示の露いあれども文なりぶ　同　白芹
初秋や村雲はうげ地蔵は　同　五世　宗瑞
さんかの日を昔ゝ高原の相ゝ禁　同　巣石
栗飯はゝ月ゝ秋月の月加茶　同　宜麦
雨を秋と定めし人ぞ暮ゝき　同　午心
雲深の神ゝいとひしゝ蟲ゝ友　同　塗来
せみは声ますぐ雲ゝ時や秋雲蝉　同　仙瓢
水の月ゝすぬしゝ立蛾けゝ月ゝ　同　青阿
三日月の隈ゝ咲古杜紫苑ゝ茶　同　水巴

深世ことも老ともいたづほうれば　同　成美
○
おもうげいいざ羽ぐるゝ手向ゝ茶　同　斗秋
夕雲や拍おもすす深時ゝ茶　同　四碎
咲ゝ深名や羽敲の杜ゝ今　同　香宜
○
嵐庵茶は水や弘誓の紅ゝなみ　同　四世　一瀧
尼法ゝ深ゝ月ゝよ秋のつ紀　同　三世　古蕉
琴は水ゝ秋　同　崑山
みのむしゝや今ゝ雲ゝを帰ゝす　同　二世　貞佐
白菊は白ゝ実生茶ゝ茶ゝ　同　五世　玄志
松風ゝ十三は徒の秋ゆゝ　同　二世　存義

水石わび多ふうげつの秋のうぜ　同　二世　乾什
人は身に蕉の上風おぼえ　同　二世　紀逸
蕉や利休が加賀を飛雪月　同　三世　悟言
末法秋のわびてふうふ涼小雨うち　同　三世　李睦
幾筋ぞ分りいすきどたの雷　同　佛炒
ものざ抱けば稀人来ふり秋は蕾　同　六世　澂十
脱けとぎれ去のうぬきつや水のおと　同　二世　永機
羽良やけとわる種のたむけぐさ　同　百紫
雷や雷十蕉あ法星は石雲いろ　同　龍臭
蕉や主のうつ紀を今も咲く　同　三世　平砂
いふづまや岩よりぐけく波の中　同　逸我

○

我うれる煙りの人岩秋のうぐ紀　糸紀　蕉虬
去ふまぬ落うや移れうれしき　同　雲雄
蕉は秀やまづ紀蕉をなぐさむる　同　定稚
れりろいうちふ戸ばくん秋の月　雑波　月居
何をて今白い蕉うどを本樵ぐ紀　同　蕉和
ものさぐわや雷を一日蕉夏は　同　雷渕
れなぐ久い紀うつで文よ紀星ぐば　伊勢　紅高
を麻やばびを去をりも移雲紀　近江　烏頂
雨戸まで岩らす家やは蕉はうち　河内　来雅
岩すき夕ぐれぐこのつうね星　尾張　毎雅
けさまでもうをや落ち月は蕉　同　竹育
秋ばふーの雷星ふる曳を雷と蔵　三河　卓池

名月や照りつゝきぬるすゞろ　同　秋峯
ぬ宿借れかねらば去ぬ屋〜　甲斐　可都里
山里やまぐせたゝらもあれ　同　鼠弓
拾さ紀のなるゝ赤ぬ屋れ声　越後　遠嘯
山れ井の水汲よ赤〜菓のは赤　加賀　其谷
窟〜起て手摘ゞ帝〜やけさの秋　信濃　素菓
中〜ふ人もむまれ〜秋れ人逢　同　一菓
いう赤〜や逆ぐ帰海あきの山　丹後　葛三
窟ゞ出いでアてムれんぞう満孔　下総　太節
七夕も数でゆちゝ海紀ゞ玉ゞ赤　安房　板長
書窟や去ゝ〜さむき辞ゞつく　陸奥　乙二
赤ゞ紀秋や起〜仏をゞ海ゞず　南部　素口

米多く拾〜ゞ〜ゞ紀礁ゝ赤　同　平南
菓ノの秋を去ゝするゞ去ゝぬ　因幡　雷沙
出窟れまぐゞ出ぬ窟のたゝをゝ赤　豊後　月仙
秋秋の去つ紀ゆすゞ〜岸のゝをれ　長崎　鞠風
礁去赤ゝ窟い出ら世弾ひゝり　紀後　蛍竹
拾ゞ出窟も赤ゝねゞと桐ゞ出去　安芸　等光
稲妻にかゞムゝちと窟る菓屋ゝ赤　松前　布席
い赤づまや猫りおちゝ海林去書　薩摩　潮叟
附ていふ法西英士の秋涼ゞろひ入といゝ〜ゞも玉漱るゝ〜ゞの
許多赤海い秦胡逆屋だゝゝりく匂我求るゝ後去紀を
昭てれゆ去赤ゝり

蓬廬青青先生撰目

竹窓玄玄大人遺意

一俳家奇人談　全三冊　出来　青青先生　著

一續俳家奇人談　全三冊　追刻　同　著

子孫繁人淡乃為種を弘ろしく代々名家蕉大園更蛇壹蕉村
故義等生その淡城あげく其風調をまもらしむ

竹窓玄玄大人遺意

一古今俳諧詠物句選　全三冊　未刻　同　著

四季詠物歳時加して千有餘題あり古人連俳古実不季の欠等なくして
玄有き人季実玄有を実に百三十八前初心の捷径とあるべし
附録一巻まるまる先生乃随筆ゆえ
そのうち肝要なるものを載せるなり　且

一俳諧雅字伊呂波引　全五冊　未刻　同　著

人倫器財鳥魚草木言語等にいたるまで部類をわけて其雅俗を
辨じ詞書を集て俳家座右に備へ歌俳書なり

文化十三丙子年仲秋落成

江戸書林

浅草御堂前　松澤庄八　各
同　新寺町　和泉屋庄次郎　同
同　南馬道町　来村半藏　開
通油町　鶴屋喜右衛門　版　志